



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	古代日本語における静態動詞シツ形のアスペクト・テン スの意味
Author(s)	渡真利, 聖子
Citation	琉球大学留学生センター紀要 = Bulletin of International Student Center University of the Ryukyus, 2: 15-29
Issue Date	2015-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30734
Rights	

古代日本語における静態動詞シツ形のアスペクト・テンス的意味

渡真利 聖子

要 旨

古代日本語における静態動詞シツ形のアスペクト・テンス的意味を見た結果、運動動詞の場合と同じく、アスペクト的意味は<限界達成性>及び<ひとまとまり性>で、テンス的には<過去>であった。静態動詞における<限界達成性><ひとまとまり性>とは現在に続かない状態の終了を表しているものである。このようなアスペクトの特徴と関連して、シツ形のテキスト的機能は<継起性>や<場面閉じ>であるということを示した。テンス的意味である<過去>とは、話し手の<一時的状態>が発話時以前のものであること、または、話し手が他のものの<存在><特性>について発話時以前に知覚したということを表している。つまり、この場合の<過去>とは、話し手の知覚体験時に焦点を当てることでさしだされる意味であるといえる。このことから、シツ形は話し手の<直接確認(知覚体験)>という認識的ムードも表していることが示唆される。

【キーワード】 シツ形, 静態動詞, アスペクト, テンス, 時間的限定性

1. はじめに

古代日本語動詞のシツ形⁽¹⁾は、運動動詞の場合、アスペクト的意味としては<限界達成性>または<ひとまとまり性>を表している(渡真利 2014)。それをふまえて、今回、本稿では、静態動詞のシツ形において、アスペクト・テンス的意味を見ていくことを試みた。本稿でいう静態動詞とは、工藤(2014)における動詞分類を基に、<存在(滞在)><特性><関係>を表す動詞のことを指している。これらの動詞は、基本的には時間的な展開性をとらえない非動的な動詞のグループである。それにも関わらず、古代日本語においては、静態動詞がアスペクト形式であるとされてきたシツ形⁽²⁾になる例がいくつかみられる。用例数は運動動詞に比べるとそれほど多くないものの、静態動詞のアスペクト形式という一見矛盾した形が存在するのはなぜであろうか。本稿では、古代日本語における静態動詞シツ形が何を表しているのか、アスペクト・テンスの観点からみていくことにする。その上で、動詞全体におけるシツ形のアスペクト的意味が文章の中でどのようなテキスト的機能をはたしているのか明らかにする。

なお、今回扱った用例は、『源氏物語』『大和物語』『平中物語』より叙述法断定・非過去の形のみである。

2. 静態動詞のシツ形

今回分析の対象とした静態動詞を以下に挙げる。

- (1) 存在（滞在）：あり，はべり，ものす，さぶらふ
- (2) 特性：ととのふ
- (3) 関係：似る

収集した用例は「あり」「はべり」「ものす」「さぶらふ」等，代動詞が多く，〈存在〉〈特性〉〈関係〉という意味分類は場面・文脈にそって行ったものである。

3. 静態動詞シツ形のテンス・アスペクト的意味

静態動詞のシツ形をテンス・アスペクト的側面から記述するにあたり，〈時間的限定性〉⁽³⁾という文法的カテゴリーと動詞分類との関係に触れておく。参考として，まず現代日本語の場合を見ておきたい。工藤（2014）では，動詞を〈時間的限定性〉の観点から〈運動動詞〉〈状態動詞〉〈存在動詞〉〈特性動詞〉〈関係動詞〉に分類している。現代日本語に



図1 現代日本語における時間的限定性と動詞の関係
 における時間的限定性とテンス・アスペクトの関係は以下の図1のとおりである。

時間的限定性がある一番左の〈運動動詞〉においてはアスペクト・テンスの対立があり，その次の〈状態動詞〉においてはテンス対立はあるが，アスペクト対立は「運動動詞のように相互排他的ではない」としている。そして，時間的限定性のない図右側の〈特性動詞〉〈関係動詞〉はアスペクト対立もテンス対立もないとしている。図の真ん中に位置する〈存在動詞〉については，時間的限定性がある場合とない場合があり，時間的限定性がある場合においてもアスペクト対立はなく，テンス対立のみである（工藤 2014：67）としている。

今回，古代日本語における静態動詞シツ形の用例を場面・文脈に従って〈時間的限定性〉の有無を見たところ，すべての用例が〈時間的限定性〉有のものであった。現代日本語動詞においては〈存在動詞〉の一部，及び〈特性動詞〉〈関係動詞〉は〈時間的限定性〉がない場合が基本であるが，古代語シツ形の場合は，〈特性動詞〉や〈関係動詞〉を使用している，個別具体的な主体の一時的な状態をあらわしており，

<時間的限定性> が全くないとは言い切れない。工藤（2014：51）でも述べられているように、動的・静的現象から特性までの間は、連続的であり相互移行が起こるものである。本稿では、分析対象としたシツ形が<時間的限定性>があるという事実から、これらのシツ形が他の形式ともアスペクト・テンス対立があるであろうという立場に立ち、その特徴を見ていくことにする。

用例の現代語訳は、基本的に『日本古典文学全集 8』『日本古典文学全集 12～17』（小学館）によるものである。一部、原文に近い形に訳を変えた箇所があるが、その場合は注を付した。

3.1 1人称主体の発話時現場外における一時的な状態

1人称の場合、話し手の発話時以前の一時的な状態を表している。シツ形でさしだされる話し手の状態は発話時には続いているものではないものである点から、シツ形によって状態の終わりのしきりを表していると考えられる。

1) 【場面：薫随人の探索により初めて秘密を知る】

御文参らする人に、〈隨身〉「あやしきことのはべりつる、見たまへ定めむとて、今までさぶらひつる⁽⁴⁾」と言ふをほの聞きたまひて、歩み出でたまふままに、〈薫〉「何ごとぞ」と問ひたまふ。(源氏・うき舟 6 - P163)

訳：お手紙をお取り次ぎする人に、〈隨身〉「変なことがございましたのを、はっきりと見とどけようといたしまして、今まで（あちらに）いました⁽⁵⁾」と言うのを、ちらっとお聞きつけになって、歩み出でおいでになるままに、〈薫〉「何事か」とお尋ねになられる。

2) 【場面：紫の上、はじめて女三の宮に対面する】

中納言の乳母といふ召し出でて、〈紫の上〉「おなじかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど、ついでなくてはべりつるを。今よりはうとからず、あなたなどにもものしたまひて、怠らむことはおどろかしなどもものしたまはんなんうれしかるべき」などのたまへば、(後略) (源氏・若菜上 4 - P83)

訳：中納言の乳母という人をお召し寄せになって、〈紫の上〉「同じご先祖をおたどり申しあげますと、恐れ多いことですが、お身内でいらっしやると存ぜられますが、機会もなくして失礼いたしておりました。今からは、ご遠慮なさらず、あちらの対などにもお出ましになられて、不行届きなことがとがございましたら、ご注意などいただけますと、うれしゅうございましょう」などとおっしゃると、(後略)

1) は、発話時以前に自分が別の場所に滞在していたことを表しており、話し手の滞在場所が発話時現場にすでに移っている点、また時間副詞「今まで」が使用されていることから、＜滞在（一時的な状態）＞が現在には続いていないことが明らかである。シツ形によって一時的な状態に終わりの局面を表していると考えられる。テンス的に見ると、現在に限りなく近い直前のアクチュアルな過去の出来事としてさしだしている。

2) は、以前は女三の宮や中納言の乳母に会えなかった状況であったが、今後は会う機会が増えとうれしいと話している場面である。次の文に「今より」という時間副詞を伴い、それまでの状態と交替する今後の新しい状況（会う機会を増やしていくこと）がさしだされている。この「はべりつる」もアスペクト的には＜滞在（一時的な状態）＞の終わりの局面を差し出していると考えられる。中納言の乳母に会って話している場面なので、「ついでなくてはべりつるを」はすでに発話時以前の話し手の状態であり、この例もテンス的にはアクチュアルな過去であることがわかる。

3.2 3人称主体の発話時現場外における一時的な状態

3人称の場合も、1人称と同様に発話時現場外での以前の一時的な状態を表している。1人称の例との違いを挙げるとすれば、3人称の文の場合、シツ形は状態の終わりのしきをさしだしているというよりも、その状態を知覚した時点で焦点をあて、ひとまとまり的に状態（＜存在＞＜特性＞＜関係＞）を捉えているという点である。

3) 【場面：従者をやって、朧月夜の素性を探る】

かの有明出でやしぬらんと、心もそらにて、思ひいたらぬ隈なき良清、惟光をつけてうかがはせたまひければ、御前よりまかだたまひけるほどに、〈良清ら〉「ただ今、北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。御方々の里人はべりつる中に、四位少将、右中弁など急ぎ出でて、送りしはべりつるや、弘徽殿の御あかれならん、と見たまへつる。けしうはあらぬけはひどもしるくて、車三つばかりはべりつ」と聞こゆるにも、胸うちつぶれたまふ。（源氏・花宴 1 - P429）

訳：君は、あの有明の女が退出してしまうのではないかと、気が気でなく、万事に抜け目のない良清や惟光をつけて、見張りをさせておおきになっていたの、君が帝の御前からご退出なさったとき、「たっいま、北の陣から、かねて物陰に隠れて立ててありました車どもが、退出してゆきました。女御様方の里方の人々がおりました中に、四位少将や右中弁などがあわてて出てきて、見送りをいたしましたのは、弘徽殿からのご退出であろうと存じました。相当の方という感じがはっきりわかりまして、車は三つほどございました」と申しあげるのにも、君は胸を衝かれるお気特になられる。

4) 【場面：源氏，夕霧とともに音楽について論評する】

〈大将〉「(前略) をさをさ際離れぬものにはべめるを，いとかしこくととのひてこそはべりつれ」と，めできこえたまふ。〈源氏〉「いと，さ，ことごとしき際にはあらぬを，わざとうるはしくもとりなさるかな」とて，したり顔にはほほ笑みたまふ。(源氏・若菜下 4 - P188)

訳：〈大将〉「(前略) 普通はなかなかきわだった演奏はできないものようですが，今宵のはじつにおみごとにととのってございました」と，おほめ申しあげられる。

5) 【場面：大君と中の君，囲碁の勝負で桜の木を賭ける】

右勝たせたまひぬ。〈女房〉「高麗^{こまらんじょう}の乱声おそしや」などはやりかに言ふもあり。〈女房〉「右に心を寄せたてまつりて西の御前に寄りてはべる木を，左になして。年ごろの御争ひのかかればありつるぞかし」と，右方は心地よげにはげましきこゆ。何ごとと知らねどをかしと聞きて，さしいらへもせまほしけれど，うちとけたまへるをり心地なくやは，と思ひて出でて去ぬ。またかかる紛れもやと，蔭にそひてぞうかがひ歩きける。(源氏・たけ川 P73)

訳：右方(中の君)がお勝ちになった。〈女房〉「高麗^{こまらんじょう}の乱声がおそいわね」などとはしゃいで言う者もいる。〈女房〉「もともと右(中の君)にお味方していますところから西のお部屋(中の君の部屋)のお近くに立っております木をわざわざ左(大君)のものとお決めになったりして。長い間のいさかいがそれだからあったのですよ⁽⁶⁾」と，右方は気持ちよさそうに中の君に加勢申しあげている。

3) は車の一時的な存在(<滞在>)を表しており，話し手が「車」を見た知覚時点が出来事時点としてさしだされる。4) は大将の夕霧が先程聴いた紫の上の和琴の技術について述べている場面である。「ととのふ」は<特性>をあらわす動詞で，和琴の技術がすぐれていることを表している。5) の主語「御争ひ」とは，2人の姉妹の幼い頃の小さいけんかから，発話時直前の囲碁の勝負までを揶揄して表したものであり，囲碁の勝敗が決まった<現在>には「争ひ」はなく，以前の一時的なものであるといえる。この3例はどれも<存在><滞在><特性>の主体が発話時にはなく，アスペクト的には，現在には続いていないものとしてひとまとまり的にさしだされている。そして，3人称でさしだされる主体のある状態を話し手が知覚した時点が発話時以前であることから，シツ形述語が表す出来事はテンス的には<過去>のある時点にくぎづけされたアクチュアルなものとしてさしだされている。

6) 【場面：源氏，紫の上に女三の宮のことを伝える】

〈源氏〉「院の頼もしげなくなりたまひにたる、御とぶらひに参りて、あはれなる事どものありつるかな。女三の宮の御ことを、いと棄てがたげに思して、しかしかなむのたまはせつけしかば、心苦しくて、え聞こえ辞びずなりにしを、ことごとしくぞ人は言ひなさんかし。（後略）」（源氏・若菜上 4 - P45）

訳：〈源氏〉「院がすっかりお弱りあそばしたのをお見舞いに参上しまして、ご同情にたえないことがあれこれありました⁽⁷⁾。女三の宮の御事を、まことに見捨てるに忍びなくおぼしめして、これこれを仰せつけになりましたので、おいたわしくてお断り申しあげることができずじまいになりました。（後略）」

7) 【場面：浮舟、薫の帰途を見、念仏に思いを紛らす】

〈妹尼〉「昼、あなたにひきぼし奉れたりつる返り事に、大将殿おはしまして、御饗のことにはかにするを、いとよきをりなりとこそありつれ」（源氏・夢のうき橋 6 - P369）

訳：〈妹尼〉「昼間、お山にひきぼし（海藻を乾燥させた食品）を持たせてあげたご返事に、大将殿（薫）がおいであそばして、急にご接待するので、ほんちにちょうどよい折だとありました」

8) 【場面：源氏に柏木の文を発見され女三の宮泣く】

出でたまひぬれば人々すこし散れぬるに、侍従寄りて、〈小侍従〉「昨日の物はいかがせさせたまひてし。今朝、院の御覧じつる文の色こそ似てはべりつれ」と聞こゆれば、あさましと思して、涙のただ出で来に出で来れ場合とほしきものから、言ふかひなの御さまや、と見たてまつる。（源氏・若菜下 4 - P241）

訳：院がお出ましになった後、女房たちも少しさがっていたので、侍従はおそば近くに寄って来て、〈小侍従〉「昨日のあれはどうなさいましたか。今朝、殿のごらんになっていたお手紙の色がよく似ておりましたが」と申しあげると、あまりの意外さにびっくりなさって、ただもう涙が後から後からあふれ出るので、お気の毒などは思うものの、なんともしようのない御方だと拝見する。

6) は主語で表される「あはれなる事ども」を話し手が認めた時点、7) は話し手が手紙の内容を読んだ時点が出来事時点であり、2例ともこの知覚体験時が発話時以前のものであるので、テンス的意味は〈過去〉である。

8) の「似る」は〈関係動詞〉である。このシツ形のさしだすテンス的な意味は、「今朝」というダイクティックな時間副詞からも、〈過去〉であることがわかる。話し手の小侍従が文を見て「色が似ている」という状態を知覚した時＝「今朝」が出来事時点である。これら3例も、3人称で表される主体が、発話時にはなく、アスペクト的には一時的な状態をひとまとまりにとらえている例である。

次の9) の「ありつ」は、他の静的な出来事とは違い、「(手紙が) 来た」のように捉

えることができる例である。

9) 【場面：源氏，女三の宮の見舞いの後，紫の上を見舞う】

(前略) おのづから心のどかに思ひてなむ。内裏よりは、たびたび御使ありけり。
今日も御文ありつとか。院のいとやむごとく聞こえつけたまへれば、上もかく思
 したるなるべし。(源氏・若菜下 4 - P246)

訳(前略) つい安心してこちらへまいりました。主上からは何度もお見舞いの
 お使いがありました。今日もお手紙があったとか。父君の院がとくに大事にな
 さるようにとお頼みおきになられたので、主上もこのようにお気をおつかいに
 されますのでしよう。

現代日本語でも「電話・メールがある」などと言えるように、<存在>を表す「ある」
 ではなく「あちらから連絡が来る」という動的な側面を捉えている用法であるとも考え
 られる。その場合、アスペクト的意味としては<変化(移動)の終了限界達成>または
 手紙の<出現>を表していることになる。時間副詞「今日(も)」と共に起しており、
 テンス的にはこの例も発話時からそう遠くない発話時以前のアクチュアルな出来事であ
 ることがわかる。

以上、1) 2) は1人称の有情主語、3) ~ 9) はすべて3人称の無情主語であり、い
 ずれもテンス的意味は<過去>であることを確認した。したがって、これらの現代語
 訳もシタ形が適切であると考えられる。しかし、次の10) の<存在>を表す「はべりつ」は、
 現代語訳が「おります」<現在>でなければおかしくなってしまう例である。

10) 【場面：六条院の蹴鞠の遊び 夕霧・柏木加わる】

大将の君は丑寅の町に、人々あまたして真理もてあそばして見たまふと聞こしめし
 て、〈源氏〉「乱りがはしきことの、さすがに目さめてかどかどしきぞかし。いづら、
 こなたに」とて御消息あれば、参りたまへり。若君達めく人々多かりけり。〈源氏〉
 「鞠持たせたまへりや。誰々かものしつる」とのたまふ。〈夕霧〉「これかれはべりつ」
 〈源氏〉「こなたへまかでんや」とのたまひて、(後略) (源氏・若菜上 4 - P129)

訳:〈源氏〉「鞠はお持たせになったか。誰々が来ているのか」とお尋ねになる。
 〈夕霧〉「誰それがおります」〈源氏〉「こちらへ来ませんか」とおっしゃって、(後略)

この「はべりつ」は、源氏に招かれてやってきた若君達のことを言っている場面であ
 る。ここの現代語訳がほかのもの(シタ形式)と違う点については、現代日本語におけ
 るムード的表現のし方と関係していると考えられる。主体の「これかれ」は話し手(夕
 霧)が伴って源氏のもとに連れて来た者たちであるので、発話現場外で<目撃>した
 というニュアンスを前面に出す現代日本語の「シタ」では表しえないからではないだろ

うか。もしここで、シタ形式（「おりました」）にしてしまうと話し手の態度として＜目撃＞性を表現することになり、一緒にここまで来た様子が出せなくなるのである。この1例については、今後シツ形をムード的観点から詳しく見ていき、再検討したい。

3.3 静態動詞シツ形のテンス・アスペクト的意味のまとめ

以上、古代日本語における述語の静態動詞シツ形（叙述法非過去形のみ）について、

表1 静態動詞シツ形のテンス・アスペクト的意味

時間的 限定性	アスペクト的な 意味	テンス的な 意味	人称	発話時現場 における 主体の有無	話し手の 確認の仕方
有	一時的な状態の ＜終了限界達成性＞	アクチュアルな 過去	1 人称	有 (以前と違う 状態)	直接体験 直接確認(知 覚体験)
	一時的な状態の ＜ひとまとまり性＞		3 人称 無情主語	無	
		※アクチュアルな 現在	3 人称 有情主語		

アスペクト的な意味とテンス的な意味を見てきた。まとめると表1の通りである。

1人称の一時的状態（例1,2）や、「手紙があった（来た）」のような慣用的な表現により動的な出来事をさしだしている場合（例9）は、アスペクト的にはその状態の終わりの限界達成をさしだしているのではないかということ述べた。3人称の用例では、1人称と同じく一時的な状態を表しているものであるが、アスペクト的には、特にある局面に焦点をあてるのではなく、その状態をひとまとまりに捉えているという違いが挙げられる。

テンス的な意味については、1人称の場合は話し手の移動等により発話時現在に続いている以前の状態であるということから＜過去＞であるといえる。一方、3人称の場合は、話し手がその＜存在＞＜特性＞等を知覚した時点が焦点化されているのではないかということ述べた。出来事を知覚時点が発話時以前であることから、これらもすべてテンス的には＜過去＞の出来事を表していると考えられる。テンス的な意味でも運動動詞のほとんどの例で明らかになった、＜発話時以前＝過去＞という意味は共通していると言える。なお、3人称有情主語の1例（例10）のみ、現代語訳を＜現在＞を表すスル形式にしたほうが適切だと思われるものがあつた。同様の例が他になかったため、テンス的な意味については、今後ムードの観点からの分析をすすめ、さらに検討していく必要がある。

今回、シツ形のテンス的な意味を＜過去＞であるとしたが、それを支えているのはほ

とんどの場合において、話し手の出来事に対する認識<直接確認>の時点であることがわかった。今後は、シツ形全体をムードの観点からみていくことで、なぜシツ形が非過去形式で<過去>の出来事をさしだすのか、シツ形の意味機能を知る手がかりとなるであろう。

4. 地の文におけるシツ形のテキスト的機能

渡真利(2014)における運動動詞のシツ形のアスペクト的な特徴、及び本稿で述べた静態動詞のアスペクト的な特徴を踏まえて、ここではシツ形のテキスト的機能について考察する。

シツ形の<限界達成性><ひとまとまり性>というアスペクトの意味は、文章の中では<継起性>または<場面閉じ>という機能をはたしている。井島(2011)ではシツ形が連続して用いられた場合、「継起的な出来事を臨場感をもって描く」(p.285)と指摘しているが、本稿もそれと同じ立場に立つものである。このことについて、以下、シツ形のアスペクトの特徴がどのように物語の流れをつくっているのか、文章の中でのシツ形のテキスト的機能を見ていくことにする。

4.1 継起性

シツ形が終了限界達成性を表すことで、それに後続する文にさしだされる新たな出来事(二重下線で示す)は、シツ形でさしだされる出来事と交替的であり、継起的な場面が描かれている。

- 11) かくてなほ見をりければ、この女、うち泣きてふして、かなまりに水を入れて、胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。されば、この水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入れる。見るにいと悲しくて、走りいでて、「いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ」といひて、かき抱きてなむ寝にける。(大和・149段 沖つ白波 P396)

訳：こうしてさらに見ていると、この女は泣きふして、^{かなまり}金鉢に水を入れて胸にあてていた。「変だ、どうするのだろう」と思ってなおも見ている。すると、この水が熱湯になってわきたったので湯を捨てた。また水を入れる。見ているとたいそう胸がこみあげてきて、思わず走り出して、「どんなお気持ちにおなりになったために、このようにはなされるのですか」といって、いきなり抱きかかえて寝てしまった。

- 12) 心地に思ふことなれば、くやしと思ひながら、とかく思ひみだるるに、四五日になりぬ。女、もの食はで、音のみ泣く。ある人々、「なほ、かうな思ほしそ。人

に知られたまはで、琴ごとをもしたまへ。さておはすべき御身かは」などいへば、ものもいはで籠りあて、いと長き髪をかき撫でて、尻に挟みつ。使ふ人々嘆けど、かひなし。（平中物語・38段 尻になる人 P541）

訳：女は食事ものどを通らず、声をあげて泣くばかり。そばにいる召使いたちは、「でも、そうくよくよと思いませんな。このたびのことは、世間に知られぬようにして、ほかのご縁をお考えなさいませ。このままで、終わられる方じゃございませんもの」などと慰めるが、ものもいわず、引き籠って、ずいぶん長い黒髪をかき撫でていたが、とうとう、尻削ぎに銕み切ってしまった。召し使う女たちは悲しむけれども、もうしかたがない。

13) 【場面：夕霧、御息所の文を雲居雁に奪われる】

宵過ぐるほどにぞこの御返り持て参れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解きたまはで、御殿油近う取り寄せて見たまふ。女君、もの隔てたるやうなれど、いととく見つけたまうて、這ひよりて、御背後より取りたまうつ。〈夕霧〉「あさましよう。こはいかにしたまふぞ。あな、けしからず。六条の東の上の御文なり。（中略）」とうちうめきて、惜しみ顔にもひこじろひたまはねば、さすがにふとも見で、持たまへり。（源氏・夕霧 4 - P413）

訳：宵の口を過ぎるころに、使いの者があのご返事をお持ちして戻ってきた。それを、大將は、あのようにいつもとは違った鳥の足跡のような筆跡なので、すぐにはとてもおわかりにならず、燈火を手もとへ引き寄せてごらんになる。女君（雲居雁）は、物を隔てておられたようであったけれども、ほんとうにすばやくお見つけになって、そっと近づいて後ろからお取りになってしまわれた。「あきれたことを。いったい何をなさる。まったくけしからぬことです。（中略）」と、ため息をおつきになってお手紙をだいじがって取りもとそうともなさらないので、女君は、取りあげてはみたもののやはり、すぐにも見ようとせず手に持っていらっしやる。

14) 【場面：薫、匂宮の裏切りを怒り、浮舟を詰問する】

〈浮舟〉「所違へのやうに見えはべればなむ。あやしく悩ましくて何ごとも」と書き添へて奉れつ。見たまひて、さすがに、〈薫〉「いたくもしたるかな、かけて見およばぬ心ばへよ」とほほ笑まれたまふも、憎し、とはえ思しはてぬなめり。（源氏・うき舟 5 - P169）

訳：〈浮舟〉「あて先が違っているように思われますので。どうしてか気分がすぐれませんので、何事も」と書き添えてさしあげた。これをごらんになり、〈薫〉「うまく言いのがれたものよ。（後略）」

11) は、金鏡の中の湯を捨ておわり、次にまた水を入れるという継起的な動作をあらわしている例である。12) は、女の髪を尼削ぎに切ってしまうという〈動作の終了限界〉を描くことで、召使たちの嘆きを次の展開として続くことができるのである。あとの2例の13), 14) もシツ形の文と後続の文が表す出来事の関係は同様である。以上のことから、シツ形は〈限界達成性〉というアスペクト的な特徴を持っていることにより、ストーリーの次の新たな展開につなげ、継起的な場面を作り出す機能を果たすことができると考えられる。

4.2 場面閉じ

かたり文では、シツ形によってさしだされる出来事で場面が終了するというような例がある。これもやはり、〈限界達成性〉というアスペクト的な意味とむすびつく、シツ形のテクス的な機能の一つである。以下に2例挙げる。

15) 【場面：源氏、尼君に意中を訴え、拒まれる】

〈源氏〉「みなおぼつかかなからずうけたまはるものを、ところせう思し憚らで、思ひたまへ寄るさまことなる心のほどを御覧ぜよ」と聞こえたまへど、いと似げなきことをさも知らでのたまふ、と思して、心とけたる御答へもなし。僧都おはしぬれば、〈源氏〉「よし、かう聞こえそめはべりぬれ場合と頼もしうなむ」とて、おし立てたまひつ。

暁方になりになれば、法華三昧おこなふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、いと尊く、滝の音に響きあひたり。(源氏・若紫 4 - P293)

訳：「万事くわしくお聞きしているのですから、窮屈にご遠慮なさらずに、思いをお寄せする、普通とは違った私の心底をおわかりください」と申しあげなさるが、いかにも不似合いなことを、そんなこともかまわずおっしゃると、尼君はお思いになって、気を許したご返事とてない。僧都がおいでになったので、「まあよい。こうして切り出して申しあげたからには、まことに心丈夫というものです」と言って、君は屏風を押し立てなされた。

明け方になったので、法華三昧（ほげざんまい）をお勤めする堂の懺せんぼう法の声の、山から吹き下ろす風にのって聞こえてくるのが、ほんとに尊く、滝の音に響き合っている。

16) 【場面：源氏、女三の宮を見舞う 女三の宮のところには柏木の嫉妬の手紙がくる】

かの人も、かく渡りたまへりと聞くに、おほけなく心あやまりして、いみじきことどもを書きつづけておこせたまへり。対に、あからさまに渡りたまへるほどに、人

間なりければ、忍びて見せたてまつる。〈女三の宮〉「むつかしき物見するこそいと心うけれ。心地のいとどあしきに」とて臥したまへれば、〈小侍従〉「なほ、ただ。このはしがきのいとほしげにはべるぞや」とてひろげたれば、人の参るにいと苦しくて、御几帳ひき寄せて去りぬ。いとど胸つぶるるに、院入りたまへば、えよくも隠したまはで、御褥の下にさしはさみたまひつ。

夜さりつ方、二条院へ渡りたまはむとて、御暇聞こえたまふ。（源氏・若菜下 4 - P238）

訳：あの人（柏木）も、院（源氏）がこうして宮のもとにお越しになっていると聞くと、身のほどもわきまえず逆恨みをして、大層な訴え言を書き連ねてお寄せになった。院が対屋たいのやにちょっとおいでになられた際に、宮のおそばには人がいなかったので小侍従はこっそりとお目にかける。「うるさいものを見せてくれるのは、ほんとにいやです。気分もいよいよわるくなるのに」とおっしゃって横におなりになるので、「でもやはりこれだけは。この端書きのお言葉がほんとにおかわいそうでございますよ」と言ってひろげたところへ人が近寄ってくるので、まことに困って、御几帳をおそばに引き寄せて立ち去った。宮は心配のあまりいっそう胸が高鳴っているのに、そのうえ院がはいっていらっしまったので、手紙をよくもお隠しになれず、御褥おしとねの下へお挿しこみになった。院はその夜のうちに二条院へお帰りになろうとして、御暇いとまご乞いの挨拶を申しあげられる。

15), 16) とともに、主体動作・客体変化動詞であり、アスペクトの意味は〈終了限界達成性〉である。2例ともシツ形の文で段落が終了し、次の段落では場面が変わっている。次に新たな展開が続くという点では、この〈場面閉じ〉の例も〈継起性〉と連続したものであると考えられる。なお、場面閉じの機能については、鈴木（1999）でも運動動詞の用例にて指摘されており、終止形シツの約50%強が場面や段落の切れ目に位置するものである（鈴木1999:221）という調査結果が述べられている。

5. おわりに

今後は資料や対象形式の条件を広げ用例増やし、テンス・アスペクト的側面についてさらに丁寧³に各形式を比較分析していく必要がある。3.のまとめでも触れたが、古代日本語のアスペクト・テンスの側面のみでなく、ムード的側面からも分析を進めることで、個々の用法についてより詳細に記述できるようになるであろう。

註

- (1) シツ形とは、動詞と「完了の助動詞」と呼ばれるツが組み合わさった形を指し、

本稿では動詞の活用の一つであると捉え「シツ形」と呼ぶ。

- (2) これまでのシツ形の先行研究については、井島（2011）及び鈴木（2009）を参照。
- (3) 時間限定性については工藤（2014）pp.33-36を参照。
- (4) 『岩波古語辞典』（1974）では、「じっとそばで見守り待機する意」とし、この用例では、第1義に挙げられている「①（身分の高い人の）身辺を見守る。そばに仕える」に近い意味と捉えた。
- (5) 『全集』の現代語訳は「手間取ってしまいました」。
- (6) 『全集』の現代語訳は「続いたのですよ」。
- (7) 『全集』の現代語訳は「ありましてね」。

参考文献

- (1) 井島正博（2011）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房
- (2) 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって－金田一的段階－」（『ことばの研究・序説』むぎ書房所収，85-104.）
- (3) 奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって」（『ことばの研究・序説』むぎ書房所収，105-143.）
- (4) 奥田靖雄（1988a）「時間の表現（1）」『教育国語』94，むぎ書房，2-17.
- (5) 奥田靖雄（1988b）「時間の表現（2）」『教育国語』95，むぎ書房，28-41.
- (6) 奥田靖雄（1993）「動詞の終止形（1）」『教育国語』2-9，むぎ書房，44-53.
- (7) 奥田靖雄（1994a）「動詞の終止形（2）」『教育国語』2-12，むぎ書房，27-42.
- (8) 奥田靖雄（1994b）「動詞の終止形（3）」『教育国語』2-13，むぎ書房，34-40.
- (9) 奥田靖雄（1997）「動詞－その一般的な特徴づけ－」『教育国語』2-25，むぎ書房
- (10) 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房
- (11) 工藤真由美（1999）「非動詞的述語のテンス」『国文学解釈と鑑賞』63（1），66-81.
- (12) 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- (13) 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- (14) 鈴木重幸（1979）「現代日本語のテンス－終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定の場合」『言語の研究』，むぎ書房，5-59.
- (15) 鈴木泰（1999）『古代日本語動詞のテンス・アスペクト－源氏物語の分析（改訂版）』ひつじ書房
- (16) 鈴木泰（2001）「時間的局在性とテンス・アスペクト－古代日本語の事例から－」『日本語文法』巻1号，くろしお出版，24-40.
- (17) 鈴木泰（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- (18) 鈴木泰（2012）『語形対照古典日本語の時間表現』笠間書院

- (19) 渡真利聖子（2014）「運動動詞のひとまとまり性と限界達成性 - 古代日本語のシツ形 -」『琉球大学留学生センター紀要』第1号, 13-26.
- (20) 日本語文法研究会編（1988）『概説・古典日本語文法 - 改訂版 -』おうふう

参考辞書

- (1) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編（1974）『岩波古語辞典』岩波書店
- (2) 上代語辞典編集委員会編（1967）『時代別国語大辞典上代編』三省堂
- (3) 中村幸彦・阪倉篤義・岡見正雄（1999）『角川古語大辞典』角川書店
- (4) 宮腰賢・石井正己・桜井満・小田勝編（2003）『全訳古語辞典 第三版』旺文社

用例の出典

- (1) 『日本古典文学全集 8 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』小学館
- (2) 『日本古典文学全集 12 源氏物語 (1)』小学館
- (3) 『日本古典文学全集 13 源氏物語 (2)』小学館
- (4) 『日本古典文学全集 14 源氏物語 (3)』小学館
- (5) 『日本古典文学全集 15 源氏物語 (4)』小学館
- (6) 『日本古典文学全集 16 源氏物語 (5)』小学館
- (7) 『日本古典文学全集 17 源氏物語 (6)』小学館

(琉球大学留学生センター)

Aspectual and Tensal Meaning of Static Verbs *Shitu*-Form in Ancient Japanese

TOMARI Seiko

Keywords: *shitu*-form, static verb, aspect, tense, temporal localization

Abstract

An analysis of the static verb form "*shitu*" in ancient Japanese revealed that its aspectual meanings are telic accomplishment and totality, are the same as the meanings of dynamic verbs, and its tensal meaning is past. The aspectual meaning "telic accomplishment" on the static verbs means completion of a state. The meaning "totality" means encompassing a state from start to finish. In association with these aspectual features, the textual function of *shitu*-form are "occurring in succession" and "closing a scene". The tensal meaning "past" expresses a temporary previous state of speaker, or an existence or a character of others which speaker perceived before the time of speech. In other words, it is a meaning "past" extracted by focusing on the time of perception. It indicates that the form "*shitu*" expresses the cognitive mood; speaker's "direct confirmation [perceptual experience]".

(University of the Ryukyus)